

# cue

15

WODTEC 朝日ウッドテック株式会社

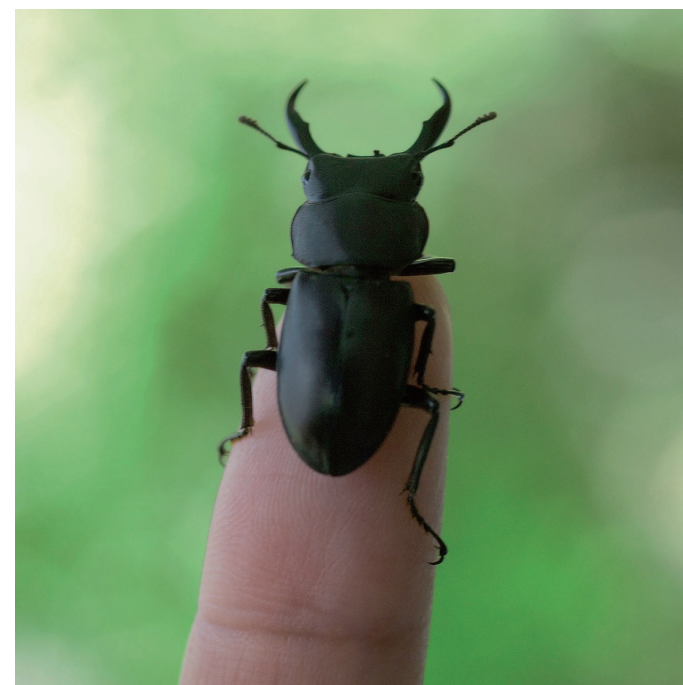
〒541-0054 大阪市中央区南本町4-5-10 TEL.06-6245-9505 発行/令和8年7月27日



特集

素材へのまなざし

Milan Design Week 2026 × 銘木文化



床の記憶  
MESSAGE FROM FLOORS.

55

縁側の無垢板にはちみつを塗ったら、  
クワガタが飛んできた。



# 素材への まなざし

Milan Design Week 2026



銘木文化

Milan Design Week 2026で掲げられた“A Matter of Salone”（サローネの本質と、素材の価値）。

つまり、「素材」に立ち返ろうというテーマです。今回久しぶりにミラノを巡って印象的だったのは、色や造形の新しさだけではなく、素材そのものの質感が、とてもリアルに感じられ、それがその空間自体の質にも大きく影響していることでした。

質感、触感、陰影、佇まい。素材へのまなざしが高まる中で、あらためて考えたいのが、木という素材です。

日本には古くから、木を単なる材料としてではなく、木目や艶、経年の表情を愛でる文化があります。その美意識は、銘木文化の中に受け継がれてきました。

ミラノで見た素材へのまなざしと、日本の木を見る眼。

今回の特集では、ミラノで見た空間と日本の銘木文化を、素材を見る視点から重ねてみます。一見異なる両者に通じる「取り合わせ」「肌理」「余白と間」「目利き」という切り口から、これからの空間に求められる素材のあり方を探ります。

（文／取材・西村）

銘木  
文化

Milan



# 取り合わせ

異なる素材が、  
空間に  
深みをつくる。

空間の印象は、一つの素材だけで決まるものではありません。木、石、金属、布。異なる素材が隣り合い、それぞれの質感が響きあうことで、空間に奥行きが生まれていきます。

ミラノの空間では、どのブランドも、素材のコントラストを強く見せるのではなく、互いを静かに引き立て合うように素材を扱っていました。石の冷たさや重みがあることで、木のあたたかさが際立つ。金属の硬質な光が加わることで、木肌や石の表情がより豊かに見える。異素材を組み合わせることで、互いの素材を引き立て、結果的にその空間の心地よさが高まっているように感じました。

その感覚は、日本の数寄屋のしつ

らえにも通じるものがあります。木、土壁、畳、竹、金属の引手。異なる質感が隣り合うことで、木のあたたかさ、土壁のやわらかさ、畳表の目、金属の小さな光が、お互いを引き立て合います。本物の素材同士が隣り合うことで、数寄屋ならではの静かな雰囲気、深みをつくってきました。

現代のインテリアにおいても、素材をどう選び、どう隣り合わせるかは、空間の質を大きく左右します。木を中心に、石や金属、布、光をどう響き合わせるか。そこに、これからの上質な空間づくりのヒントがあるように感じます。空間の豊かさは、素材そのものの力だけでなく、うまく組み合わせることによって生まれるのだと思います。

玉川遠州流家元・大森家「玉川庵(ぎょくせんあん)」  
炉まわりに、松の木目、畳表の目、釜の金属の質感が静かに響き合う。

銘木文化

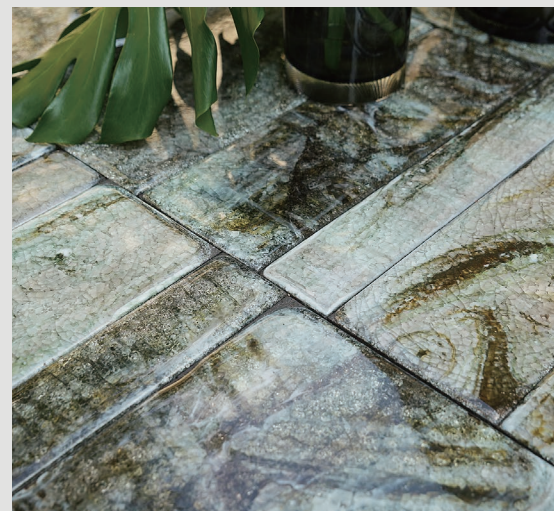
Milan Design Week 2026 | Poliform  
赤い石材(ロッソレバント)の天板と、黒く仕上げたエルム(楡)の面材が引き立て合うキッチン。



Milan

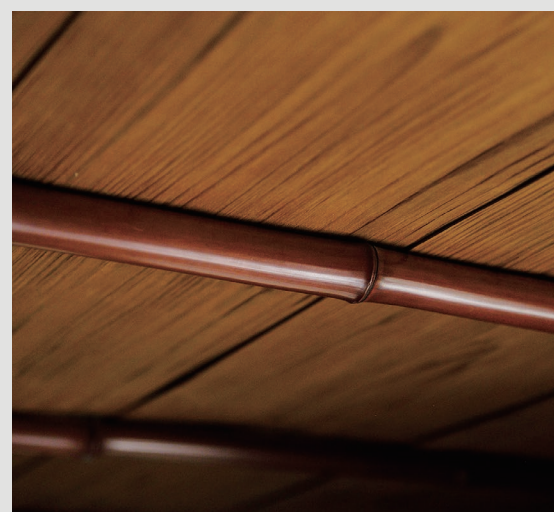
Milan Design Week 2026

右からPoltrona Frau、Paola Lenti、Porro  
大理石（オンブラ・ディ・カラヴァッジョ）と革、  
釉薬、黒く仕上げたオーク。  
異なる素材の表情が際立つ、ミラノの肌理。



銘木  
文化

右から銘木館、  
南禅寺塔頭・正の院「偃壺庵（せんこあん）」、  
南禅寺塔頭・正の院本堂  
春日杉の空、天井板、竹、使い込まれた床板に宿る、  
日本の木の空間の肌理。



ミラノでは、木、石、革、釉薬など、  
素材ごとの肌理を生かした家具が印象的でした。大理石の複雑な模様と  
革のやわらかなシボ、釉薬のにじみ、  
黒く仕上げたオークの木目。それぞれの素材が持つ質感を生かしながら、そこに光が当たることによって上質感が立ち上がっていました。

肌理は、近づいて見たときに初めて気づくものです。光の角度によって見え方が変わる艶、手で触れたくなる凹凸、使い込むことで深まる表情。それらは空間の印象を大きく左右する大切な要素になっています。

日本の木の空間にも、同じような感覚があります。銘木の木目や竹の節、床板に残る艶や傷。そこには、素材を選び、使い込み、時間を重ねてきた痕跡があります。ミラノの多素材の肌理と、日本の木の肌理。見え方は違っても、素材の表面に空間の質が表れるという点では、通じるものがあるように思います。

触れたいくなる理由がある。

木目の細やかな揺らぎ、繊維の艶、表面に残るわずかな凹凸。肌理は、素材の表情を決める大切な要素です。

きめ  
肌理

まなざしを重ねる②



# 余白と間

素材は、余白の中で立ち上がる。

空間の質は、素材そのものだけで決まるわけではありません。何を置くかだけでなく、何を置かないか。どこに余白を残し、どのような間をつくるかによって、質感の見え方は変わります。

ミラノでは、ブランドによって表

現も見せ方もさまざまでした。その中で印象に残ったのは、過度に飾り込まず、素材やプロダクトが自然に目に入る余白をつくっていた展示です。例えば、エルメスの展示は、一見、物足りないくらい白い空間でしたが、その中に木や石、布の表情がすとと浮かび上がっていました。素材を強く主張させるのではなく、余白によってその存在感を引き出しているように感じました。

その感覚は、日本の数寄屋の空間にも通じています。床の間や床脇、柱と柱のあいだにある静けさ。そこでは、何もない場所が単なる空白ではなく、木の線や面、畳の広がり、光の陰影を受け止める大切な要素になっています。

余白があるからこそ、素材の輪郭が見えてくる。間があるからこそ、木の表情や時間の重なりが伝わってくる。

ミラノの空間と日本の数寄屋。見え方は異なりますが、素材を生かすために余白を大切に感じる感覚には、共通するものがあるように思います。空間の質は、使われているものだけでなく、そのまわりにある余白によってもつくられていると感じました。

銘木文化

玉川遠州流家元・大森家「玉川庵(ぎょくせんあん)」  
床の間と畳がつくる、数寄屋の余白。



Milan

Milan Design Week 2026 | HERMÈS  
白い面と木の線がつくる余白。







銘木文化

南禅寺塔頭・正徳院「傳壺庵」  
土壁、木肌を感じさせる柱、竹の意匠が  
静かに調和する数寄屋のしつらえ。

素材の先にある時間を読む。

# 目利き

まなざしを重ねる④

ミラノで見た空間の中で印象に残ったのは、素材をただ新しく見せるのではなく、その素材が持つ質感や背景を見極め、ふさわしい場所で生かそうとする姿勢でした。木、石、革、金属。どの素材を選び、どの面積で見せ、どの光の中に置くのか。その判断の積み重ねが、場の印象をつくっているように感じました。

通じています。数寄屋建築において、銘木商や数寄屋大工は、木や土、竹の素性を見極め、素材がもっとも美しく生きる場所を選んできました。木の美しさだけでなく、木の癖、色艶、形、光の入り方、時間とともにどう変わっていくかまでをイメージして空間を作ってきたのだと思います。銘木商を原点に持つ私たちにとって、素材を見ることは、単に美しい木

目を選ぶことではありません。その木を使った製品がどの空間で、どのように使われて、どのように時間を重ねていくのかを想像することも含まれています。

素材の先にある時間まで読むこと。その眼差しは、現代の設計者やコーディネーターの空間づくりに、また素材や部材をつくるメーカーにとっても大事な視点だと思っています。

Milan Design Week 2026 | LAURAMERONI  
ウォルナット、革、ガラスなど、異なる素材の質感を空間の中で生かした展示。

Milan





## 木の価値を、もう一度見つめる場所「銘木館」



1階には、地際直径3mの杉をはじめ、銘木館を象徴する大径木が横たわる。人と比べることで、その圧倒的なスケールが伝わる。



三代将軍・徳川家光の乳母、春日局お手植えのケヤキ。登奎と出会奎が優美な表情を見せる。



上の写真の杉(元口の木口面)。樹齢500年、立木の樹高50mで長蔵杉の名を持つ。銘木館で最も巨大な木。



2階の収蔵スペースに並ぶ銘木の数々。樹種や表情の違いから、木という素材の多様性が見えてくる。



ズワイガニの甲羅や足を思わせる「蟹奎」。自然が生み出した、二つとして同じものがない木の表情。

今回の特集で、日本の木を見る眼を考えるにあたり、銘木館を訪ねました。銘木館は、公益財団法人日本住宅・木材技術センターが、国内外の銘木を保管・公開している施設です。館内には、長谷川萬治商店の創業者である長谷川萬治翁が集めた銘木を中心に、約400点のコレクションが収められています。

銘木に現れる年輪、色艶、空の表情。一つひとつに、木が育ってきた時間と歴史と物語、その木だけが持つ個性が刻まれています。材面の美しさ、大きさ、形の珍しさ、由緒や逸話。それらは、その銘木がかつて生きていた素材だからこそ感じられる価値です。自然が生み出した揺らぎや癖、二つとして同じものがない表情の中にこそ、木を見る面白さがあります。

銘木館で目にしたのは、木という素材の力であり、同時に、その力を見出してきた人の眼差しでもありました。

ミラノで見た素材への関心は、決してトレンドだけではありません。日本には古くから、木を見つめ、愛で、空間の中で生かしてきた文化があります。

銘木館は、木という素材に向き合う原点を、もう一度確かめさせてくれる場所でした。

### 銘木館

公益財団法人 日本住宅・木材技術センター内  
〒136-0075 東京都江東区新砂3-4-2  
開館時間: 10:00~16:00  
休館日: 土曜・日曜・祝日・年末年始  
見学方法: 要事前予約  
TEL: 03-5653-7663  
FAX: 03-5653-7582  
<https://www.howtec.or.jp/publics/index/252/>

Milan



素材は、仕上がった瞬間の見え方を決めるだけではありません。時間とともに変化し、使う人の記憶と結びつきながら、空間そのものを育てていきます。色や柄を似せることはできても、本物の素材が持つ時間や質感、触れたときの実感までは簡単に写し取れません。

だからこそ、これからの空間では、素材そのものが持つ質感や時間の価値をどう選び、どう生かすかが、より大切になっていくのではないのでしょうか。とりわけ木は、経年によって深まり、空間になじみ、人とともに育っていく素材です。

その選択は、仕上がった瞬間の見え方だけでなく、時間とともにどのような空間を育てていくかを見立てることもあります。設計者やコーディネーターの皆さまの眼差しによって、素材は空間の中で生かされ、時間とともに深みを増していきます。

銘木商を原点に持つ朝日ウッドテックは、これからも木という素材に向き合い、その質感や表情、時間とともに深まる価値を、現代の空間づくりに届けていきます。

銘木文化



素材を選ぶことは、  
未来を見立てること



# 「素材の時代」へ。

ミラノデザインウィーク2026に見る、  
上質な空間価値の変化

## ミラノデザインウィーク2026レポート

今年のミラノで強く感じられたのは、華やかさや装飾性で魅せるデザインから、素材そのものの質感や背景、時間の価値を丁寧に伝えるデザインへの移行でした。サローネのテーマは「A Matter of Salone」。“Matter”には「素材」と「本質」という意味があります。会場では、木、石、有機的なモチーフなどのマテリアルを主役にしたビジュアルが展開されていました。色や形のインパクトよりも、素材、余白、静けさ、経年の価値をどう空間に落とし込むか。ミラノで見てきた変化を、コーディネートと木質トレンドの視点から読み解きます。

色を抑え、  
素材で奥行きをつくる。

coordinate

コーディネート傾向としては、昨年から続く「素材を活かした低彩度」と「黒を効かせたコントラスト」が継続。そのうえで今年、グレイやベージュを基調とした低彩度の空間に、ブラウン系を穏やかに重ねる配色がより目立っていました。木、石、金属、ファブリックなどの異素材を組み合わせながらも、色の主張は抑え、質感の違いで空間に奥行きをつくる表現が見られます。また、ブラウン系、テラコッタ系、バーガンディ系、グリーン系などの有彩色も、鮮やかに主張するのではなく、彩度を抑えたトーンで空間になじませる使い方が印象的でした。ラグジュアリーは、「見て分かる高級感」から、「感じる上質感」へと変化しているように感じられます。

### 素材を活かした低彩度

色数を抑え、木質やファブリック、ラグなどの素材感で、空間をやわらかくまとめるコーディネート。



Gervasoni



FLEXFORM

### 黒を効かせたコントラスト

黒を主役として強く見せるのではなく、低彩度の空間を引き締めるアクセントとして使う表現。



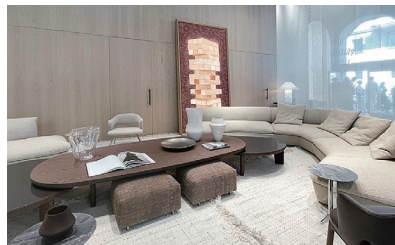
ARMANI/CASA



Poliform

### 低彩度+ブラウン系

グレイやベージュを基調に、ブラウン系を穏やかに重ねることで、落ち着きのある空間に。



FLEXFORM



Porada

### 注目カラーの傾向

#### ブラウン系

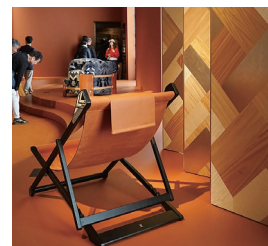
落ち着きと温もりをもたらす色。



B&B Italia

#### テラコッタ系

空間に温度感をもたらす色。



Louis Vuitton

#### バーガンディ系

深みと上質感を感じさせる色。



Paola Lenti

#### グリーン系

自然素材と穏やかなじむ色。



Zanotta



「A Matter of Salone」をテーマに展開されたサローネのキービジュアル。花びら、スポンジ、石、木、金属など、異なる素材を主役に据えた表現が、素材そのものの価値や本質に立ち返る今年のメッセージを象徴している。



写真で見る、素材と空間の気になるトピックス



ラウンドシェイプの広がり

コーナーを大きく丸めた形状や、やわらかな曲線を持つディテールが継続。低彩度の空間に、包まれるような心地よさを加えている。

FLEXFORM

角を大きく丸めた収納家具。低艶の木質感とやわらかな曲線が、空間に穏やかな上質感を与えている。

キッチンの家具化

EuroCucina開催年となった今年、キッチンリビングと一体化する家具のように見せる流れがより明確に。木質、石材、金属を組み合わせた、空間性の高い表現が見られた。

Boffi:DePadova

木質のラウンドカウンターに石材を組み合わせたキッチン。空間の中心となる家具のような存在感を放っている。



素材に宿る時間の表現

古木や再生材など、素材が重ねてきた時間や背景を価値として伝える展示が見られた。サステナブルであることに加え、素材の物語をどう魅力に変えるかが問われている。

山翠舎 SANSUI-SHA

古民家で使われてきた古木を展示。傷や色の変化を隠さず、木が重ねてきた時間そのものを価値として見せている。

異素材の調和

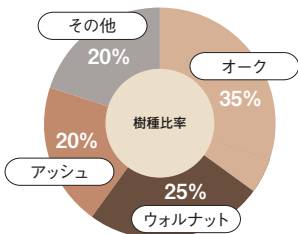
木、石、金属、レザー、ファブリックなどを組み合わせながらも、強いコントラストではなく、穏やかに響き合わせる表現が目立った。

MERIDIANI

異なる素材を低彩度のトーンで構成。素材同士を穏やかに響き合わせるマテリアルミックスが印象的。



Woody Trend



木質表現は、主張から調和へ。

木質トレンドでは、オーク、ウォルナット、アッシュを中心に、低艶で自然な質感を引き出す仕上げが定着していました。無塗装に近いインビジブル仕上げや、艶を抑えたマットな質感は、木目の力強さを穏やかに見せ、素材そのものの質感を引き立てています。

また、低彩度着色では、従来から見られたライトグレーに加え、上質なミッドグレーやブラウン系の表現が広がっていました。柔らかな動きのある柾目に低彩度ブラウンを重ねるなど、木目を活かしながら空間になじませる中間明度の表現が充実している点も印象的です。

さらに、柾目や追い柾、ブックマッチ、スリッブマッチなど、突板や木目のレイアウトによって上質感を整える見せ方も見られました。木を強く主張させるのではなく、仕上げ、色、木目の整え方によって空間全体と調和させる。木質表現は、空間の主役でありながら、より自然に溶け込む存在へと変化しています。

インビジブル・マット仕上げの定着



FLEXFORM

欧州オーク突き板の抑揚を、インビジブル仕上げで穏やかに見せたテーブル。



Poliform

ウォルナットのマットなインビジブル仕上げを採用。重厚感を抑え、空間になじむ木質感に。



Louis Vuitton

欧州アッシュの白さと繊細な木目を、インビジブル仕上げで自然に引き出したチェア。

低彩度着色・中明度の広がり



NATUZZI Italia

ミッドグレーとブラウンに見られた中明度の木質表現。木目を活かしながら、空間になじむ穏やかな表情に。

突板・木目レイアウトの上質化



Porro

連続する木目を扉割りに合わせた収納家具。素材感と端正な上質感を両立している。

Porada

整った縦方向の木目とラウンドした端部が印象的な収納家具。端正さとやわらかさを併せ持つ。



# MANAS

紀  
行

家  
具



内装設計: Yokobori Architect & Associates / 写真撮影: Nacasa & Partners

「はじまりの色」からつくる  
心地よい空間

マナトレーディング

床と壁から、

空間を考える。

創業当初は、会長が海外展示会などで実際に見つけてきたエディターブランドとの取引からスタートしました。ミラノの展示会で出合ったヨーロッパのテキスタイルブランドには、美しく洗練されたデザインだけでなく、それぞれにストーリーがあったそうです。最近では、海外ブランド側から「ぜひ日本で取り扱ってほしい」とお声がけをいただくケースも増えています。

輸入ファブリック・輸入壁紙を中心に、ラグ・照明・モールドディングなど、空間を構成する幅広い商材を取り扱っている点が特徴です。現在では、4万点を超える商品の世界各国から輸入しています。もともとはファブリックから始まった会社ですが、現在では「空間全体をどう成立させるか」という視点で、トータルコーディネート提案を行っています。

マナトレーディング様の強みや  
特徴について教えてください。

空間の印象を大きく左右する、「床」と「壁」。それらをどのような色や素材で組み合わせるかによって、空間の雰囲気や過ごし心地は大きく変わります。

マナトレーディング様では、「空間全体としてどう成立させるか」という視点で、壁紙・床材・ファブリックを組み合わせたトータルコーディネート提案を行っています。

今回は、壁紙在庫コレクション「TECIDO」の完成発表会や東京ショールームを通して、マナトレーディング様が考える空間づくりについて伺いました。

ミラノの街で、思わず足を止めた展示たち

moooi

25年の歩みを、巨大なポートレートで見せる

moooiは、25周年を記念した展示を開催。歴代のデザイナーたちの巨大なポートレートが会場を彩り、ブランドの歩みと創造の歴史を空間で見せていました。



Gucci

“見る”だけでなく、参加するブランド体験

Gucciの展示では、来場者がコインを入れてドリンクを受け取る自販機が登場。高級ブランドでありながら遊び心があり、体験として記憶に残る展示でした。



MONCLER

巨大なタコが、10 Corso Comoを占領

MONCLERの展示では、ミラノの人気スポット「10 Corso Como」に巨大なタコが出現。建物を覆う大胆な演出で、ブランドの世界観を強く印象づけていました。



川島織物セルコン

織物で表現する、時間の層

「織の地層」をテーマに、地層の堆積と織物の積層を重ねた展示。素材の質感や光の陰影を通じて、織物に宿る時間を感じさせる空間でした。







マナトレーディング 東京ショールーム  
〒153-0051  
東京都目黒区上目黒1-26-9 中目黒オークラビル 4F  
営業時間: AM10:00-PM6:00  
定休日:日・祝日・夏季・年末年始  
TEL : 03-5721-2831



東京ショールーム  
電動カーテンと照明が連動し、時間帯による空間の変化も体感できる。



TECIDO完成発表会  
彩度の高い壁紙に対し、床材にはエレガントなトーンを採用し、心地よさを表現している。



今回のTECIDO完成発表会では、「床」を起点に空間を構成されているような印象を受けました。

今まで、どちらかというと商品にフォーカスしてご紹介することが多かったんですけど、改めて空間をトータルコーディネートする視点で考えた時に、まず大切なのは「どんな空間にしたいか」というイメージなんじゃないかと思ったんです。そのため今回は、商品単体ではなく、インテリアスタイルや空間イメージから切り口を考え、6つのスタイルで構成していきました。

空間イメージを構成していく中で、特に重要だったのが「色」の考え方でした。その背景には、社員全体で色彩について学ぶ機会があり、「この色とこの色を合わせると心地よく見える」「同じ赤でもトーンによって印象が変わる」といった、空間としての色の見え方を改めて考えるようになりました。色相・彩度・明度を整理しながら、空間として心地よく見えることを意識して構成していきました。

その中で、改めて重要だと感じたのが、「床」と「壁」の関係性でした。壁紙って、実はカラーのものを選ぶのがすごく難しいんです。だからこそ建築的に、床・壁って平面になっていくところで、トータルで合わせていきたい、という考え方がありました。床と壁のマッチがないと、インテリアは良いものにならないと思うんです。そういった考え方をベースに、空間コンセプトごとに床材を「はじまりの色」として捉えながら、空間全体のトーンを構成していきました。

数あるフローリングメーカー様の中でも、朝日ウッドテックさんの商品は、天然素材という部分にすごくこだわられている印象がありました。資料なども拝見する中で、「本物の美しさ」や「自然由来の美しさ」に着眼されている点にすごく共感したんです。私たちも多様な素材や質感を扱う中で、「どういう想いで作られているか」「どんな背景を持った素材なのか」という部分をすごく大切にしています。だからこそ、本物思考同士が組み合わせることで、より上質な空間が作られていくのではと感じました。6つの空間スタイルに合う床材が揃っていたことも、お声がけた理由の一つです。

東京ショールームでは、実空間展示も印象的です。

以前のショールームは、見本帳を並べるライブラリー形式が中心でした。実際の空間で素材がどう見え、どう使われるのかを体感できる場として、現在のショールームが生まれました。5階フロアは、横堀建築設計事務所のコマタトモコさんにデザインしていただいて、ラグジュアリー空間を意識してコーディネートされています。また、リビング・ダイニング・寝室といった実際の居住空間をイメージした構成も特徴の一つです。素材単体ではなく、空間全体としてどう成立するかを体感できるショールームになっています。

(文)取材柳





表紙の写真の左は、京都・玉川遠州流家元 大森家の数寄屋の空間。茶の湯の美意識が息づく空間には、木、畳、障子、庭の緑が静かに調和しています。右は、ミラノで訪れたボルトリナ・フラウのショールーム。京都とミラノ、場所も背景も異なる二つの空間ですが、素材、光、余白が生み出す豊かさには、どこか共通する感覚がありました。

## 編集後記



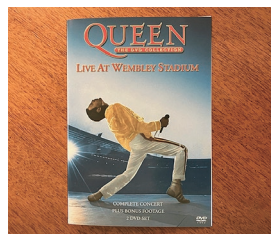
今年も夏の休日は、子どもたちと網と虫かごを持って虫探しへ。関西ではクワガタは6月中旬ごろから、カブトムシは7月上旬から中旬にかけてがシーズンです。この日は朝早くから近くのスポットへ向かいましたが、お目当てには出会えず、代わりにヤモリを3匹見つけて飼い始めることに。今ではヤモリのエサになるバッタ探しが日課になり、子どもたちと小さな生きものの世界を楽しんでいます。(西村)



今回からCUEの制作に参加させていただくことになりました柳です。いやいや期真っ盛り&乗り物が大好きな3歳の息子は、体力無限大で毎日その後ろを必死に追いかけています。現在、夫が東京へ単身赴任中のため、念願のトイ・ストーリーホテルが予約できたので、家族で初ディズニーランド参戦を今から楽しみにしています。(柳)



今回ご紹介するのは1986年ロンドンのウェンブリースタジアムで開催されたQUEENのコンサートを完全収録したDVD『Live at Wembley 86』です。各メンバーの円熟味溢れるライブパフォーマンスを堪能する事が出来る作品です。このコンサート以降、フレディ・マーキュリーの病状が悪化していった為、QUEENオリジナルメンバーとして地元ロンドンでの最後のコンサートとなってしまいました。(相原)



発行日 2026年7月27日  
編集長 西村公孝  
デザイン 鈴木信輔(ボード)  
発行 朝日ウッドテック株式会社

cue

15

【cue(キュー) = 手掛かり、きっかけ】

## 映画「ボヘミアンラブソディー」で登場するギター

### ハンドメイドギター

映画「ボヘミアン・ラブソディー」はクイーンのボーカリストであるフレディ・マーキュリーの伝記映画で第91回アカデミー賞で主演男優賞他4部門を受賞して注目を集めましたので多くの方がご覧になったと思います。映画ではフレディ・マーキュリー中心に物語が進んでいく為、ボーカル・コーラスの多重録音を駆使したレコーディング風景等が詳細に紹介されていましたが、やはりクイーンのサウンドの魅力はエレクトリックギターを多重録音する事で音に厚みと深みを持たせたギター・オーケストレーションにあると言っても過言ではありません。そのクイーンでギターを担当しているのがブライアン・メイです。ブライアン・メイはクイーンとして活動するまでは大学で宇宙工学を学んだり中学校で教鞭を執って

いたり優れた頭脳を持っていたせいか、彼がほぼメインで使い続けたギターはエンジニアだった父親と一緒に16歳から2年の歳月を費やして自身で設計から制作迄を手掛けたギターで通称「レッドスペシャル」と呼ばれています。

### 唯一無二のギターサウンド

多くのギターリストやベーシストはプロミュージシャンも含めて楽器メーカーが製作した状態のものをそのまま使うのが大半です。エリック・クラプトンやジェフ・ベックの様に楽器メーカーがシグネチャーモデルとして提供するケースもありますが、「レッドスペシャル」は自身による完全ハンドメイドの為、このギターを使っているのは勿論ブライアン・メイ本人だけです。(コピーモデルも販売されていますがプロミュージシャンで使っている人は皆無だと思われます。)正にクイーンのサウンドには欠かす事の出来ないブライアン・メイの分身の様な存在のギターです。



### レッドスペシャルに使われている木材

ネック材にはホンジュラスマホガニー、指板には主流のメイプル・ローズウッドではなくホワイトオークが使われています。またボディは一目見るとソリッド構造(空洞無し)の様に見えますが実はセミホロウ構造(空洞有り)でホワイトオーク材を主体とし表面にはホンジュラスマホガニーで仕上げてあります。実はこれらの木材は100年以上前の暖炉に使われていたマホガニー材やビンテージ家具テーブルのホワイトオーク材が再利用されて使われています。あえて指板やボディ材に100年以上経過し乾燥きったホワイトオーク材・ホンジュラスマホガニーの影響



ブライアン・メイ (Wikipediaより)

であの深みのある独特のサウンドに繋がっているのかもしれない。クイーン初期頃は「レッドスペシャル」の特徴を活かした独特のサウンドがシンセサイザーの音であると誤解される事があった為、アルバムのクレジットに「シンセサイザーは使われておりません」と書かれてあった事は有名な話です。今度、映画「ボヘミアン・ラブソディー」を観る機会があったら是非ギターにも注目して観て下さい。(文・相原)